「風　姿　花　傳」(1/3)

世阿弥　著　　世阿弥(1363？～1443？)
野上豊一郎・西尾　実　校訂　　世阿弥 - Wikipedia
能 - Wikipedia

岩波文庫　３３－００１－１
ワイド版岩波文庫31
岩波書店　1991年6月第1刷発行
2009年8月14版発行

目次

凡例
(序)
第一　年来稽古條々(ねんらいけいこじょうじょう)
第二　物学條々(ものまねじょうじょう)
第三　問答條々(もんどうじょうじょう)
第四　神儀云(しんぎうん)
第五　奥儀讃歎云(おうぎさんたんうん)
第六　花修云(かしょううん)
第七　別紙口伝(べっしくでん)
校訂者の言葉

(序)風姿花傳
それ、申楽延年(さるがくえんえん)の事態(ことわざ)、その源(みなもと)を尋ぬるに、あるひは佛在所(ぶつざいしょ)より、起り、あるひは神代より伝わるといえども、時移り、代隔たりぬれば、その風(ふう)を学ぶ力及び難し。近来(ちかごろ)、万人のもてあそぶところは、推古天皇の御宇に、(聖徳太子)、秦河勝(はたかわかつ)に仰せて、かつは天下安全のため、かつは諸人快楽(しょにんけらく)のため、六十六番の遊宴をなして、申楽と號せしより以来(このかた)、代々の人、風月(ふげつ)の景を假(か)りて、この遊びの媒(なかだち)とせり。その後、かの河勝の遠孫、この藝を相続(あいつぎ)て、春日(かすが)・日吉(ひえ)の神職たり。よって、和州(わしゅう)・江州(ごうしゅう)の輩(ともがら)、両社の神事に従う事、今に盛んなり。されば、古きを学び、新しきを賞する中にも、全く、風流を邪(よこしま)にすることなかれ。ただ、言葉賤しからずして、姿幽玄(ゆうげん)ならんを、承(う)けたる達人とは申すべきか。まづ、この道に至らんと思わん者は、非道を行(ぎょう)ずべからず。ただし、歌道は風月延年(ふげつえんねん)の飾りなれば、もっともこれを用ふべし。およそ、若年より以来、見聞き及ぶところの稽古の條々、大概注(しるし)置くところなり。
一、好色・博奕・大酒、三重戒、これ古人の掟なり。
一、稽古は強かれ、諍識はなかれとなり。

はじめに：現代語訳(以下T.K.訳)

(厳島神社の能舞台)

申楽というものの起源は仏教伝来以来とも、神代の時代からとも言われる。古いことなので定かではない。今は、大方の人が想像しているには推古天皇の時代に、摂政の聖徳太子が秦河勝(はたかわかつ)に命じて社会がまた大衆皆が娯楽となるように、66の番組を作らせてから、申楽(さるがく)と呼び、社会が平和であるように、また大衆皆が娯楽となるように、の神職としてきた。
歴史を調べ、新しさも取り入れてきたが、決してその本質を損なうことはなかった。言葉遣いを粗野にせず、奥ゆかしさ、幽玄を伝承している人が達人・名人であるとされた。
歌は自然を感じさせ、長生きしそうに感じさせるので取り入れられている。若いころから見たり聞いたりして稽古・練習をしていく上で、注意させられていることがある。

一つは、女好き、バクチ、大酒を三大禁止事項として先輩たちから戒められている。もう一つは、稽古・練習に励むことを最優先にして、けっして言い争いをしてはならぬ、と言われている。

風姿花伝　第一　年来稽古條々

七歳

一、この藝において、大方、七歳をもて初めとす。この此（ころ）の能の稽古、必ず、その者自然とし出す事に、得たる風體あるべし。舞・働きの間、音曲、もしくは怒れる事などにてもあれ、ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさ、すべし。さのみ、よき、あしきとは数ふべからず。餘にいたく諫（いさ）むれば、童は気を失ひて、能ものぐさくなり立ちぬれば、やがて能は止まるなり。ただ、音曲、働き・舞などならでは、せさすべからず。さのみの物まねは、たとひすべくとも、数ふまじきなり。大場（おおにわ）などの脇の申楽には立つべからず。三番・四番の、時分のよからんずるに、風體（ふうてい）をせさせすべし。

現代語訳：風姿花伝　第一　年齢に応じた稽古・練習について

7歳の頃

（右端の子役は面をつけていない・直面）

芸能の世界では、だいたい7歳からこの道に入っている。この年頃では能の稽古・練習は本人が自然とその気になって始めることがその年頃の能力にふさわしい。舞や演技の稽古の合間にも音楽、伴奏などについてもその気にならないでいても、ふとしたきっかけでやる気になるまで、好きなようにさせて置くべき。稽古や練習の時に、決して良いとか、悪いとかいってはいけない。子供はやる気をなくして、能が面倒くさいと思い,伸びる力を失ってしまう。音楽や演技、舞の稽古を急がせてはならない。子供が大人の真似をしていてもとやかく言ってはならない。おおきなイベントや公演があっても決して出してはいけない。その日の3番目か4番目の演目の中で本人が得意なことをさせるべきである。

十二、三より

この年の此（ころ）よりは、早や、やうやう、聲も調子にかかり、能も心づく此（ころ）なれば、次第次第に、物数をも教ふべし。先づ、童形（とうぎょう）なれば、何としたるも幽玄なり。聲も立つ此（ころ）なり。二つの便りあれば、わろき事は隠れ、よき事はいよいよ花めけり。大方、児（ちご）の申楽に、さのみに細かなる物まねなどは、せさすべからず。当座も似合はず、能も上がらぬ相なり。ただし、堪能（かんのう）になりぬれば、何としたるもよかるべし。児（ちご）と云ひ、しかも上手ならば、何かはわろかるべき。さりながら、**この花は、誠（まこと）の花**には非ず。ただ、**時分の花**なり。されば、この時分の稽古、すべてすべてやすきなり。さるほどに、一期の能の定めにはなるまじきなり。この此（ころ）の稽古、やすき所を花に当てて、態（わざ）を大事にすべし。働きも確かに、音曲をも、文字にさはさはと当たり、舞をも、手に定めて、大事ににして稽古すべし。

12、3歳の頃：現代語訳

この年の頃から声も明瞭になり、能の演技も理解できるようになるので、演目の数を増やして教えてもいい。とはいえ、まだ子供なので子供の役としてはそれなりにこなすことができる。だからといって難しい役をさせてはならない。ただし、勘がよくなれば、す子役としては役をこなせるだろう。子役として上手であればいうことない。

けれども、この花（みせどころ）は本物とはいえない。ただ年相応のものである。この時期の稽古・練習はすべて順調にいく。だから花（みせどころ）を一時期だけのものにならないようにしなければならない。そのためにはこの時期、稽古・練習は得意なことに花（みせどころ）をつくり、演技を丁寧にすべき。身体の動きも的確に、音楽に合わせ、歌詞こあわせ、舞の動きも手の動きに注意をして稽古・練習をすべきだ。

十七、八より
この此（ころ）は、また、餘りの大事にて、稽古多からず。先づ、聲変わりりぬれば、**第一の花**失せたり。體（てい）も腰高になれば、かかり失せて、過ぎし此（ころ）の、聲も盛りに、花やかに、やすかりし時分の移りに、手立てはたと変わりぬれば、気を失う。結句（けっく）、見物衆もをかしげなる気色見えぬれば、恥ずかしさと申しかれこれ、ここにて退屈するなり。この此（ころ）の稽古には、指をさして人に笑はるるとも、それをば顧みず、内にては、聲の届かん調子にて、宵（よい）・暁（あかつき）の聲を使ひ、心中には、願力をお越して、一期の堺ここなりと、生涯にかけて能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここにて捨つれば、能は止まるべし。惣（そう）じて、調子は聲によるといへども、黄鐘（おうしょう）・盤渉（ばんしょう）を用ふべし。調子にさのみかかれば、身なりに癖出でるものなり。また、聲も、年寄りて損ずる相なり。

17、8歳の頃：現代語訳

この年頃は大事をとって、あまり稽古をしない。というのも、声変わりがあって、花（みせば）が亡くなる。體も大きくなって、子供らしさがなくなり、幼いころの声や姿が次第に変化していくので、やる気をなくしてしまう。観客もその変化を笑い、本人も嫌気がしてくる。そんな時期の稽古・練習は人から指さされて笑われても、そんなことに気を取られないで、家では出しやすい声で、朝夕の稽古・練習をすべきである。心の中でやる気を起こして、ここが人生の分かれ道と思い、生涯の仕事として能より他に道はないと決心して稽古・練習に励むこと。ここで止めれば能の芸人への道は閉ざされてしまう。声変わりの時期は、その人の声の質にもよるが、黄鐘（おうしょう・中音域）と盤渉（ばんしょう・低音域）の間の音程をとったらいい。声の調子をなおざりにすると姿勢にも現れるし、年を取ってからも困った癖が残る。

二十四、五
この此（ころ）、一期の藝能の定まる初めなり。さるほどに、稽古の堺なり。聲も既に直り、體も定まる時分なり。されば、この道に二つの果報あり。聲と身なりなり。これ二つは、この時分に定まるなり。年盛りに向かふ藝能の生ずる所なり。さるほどに、外目（よそめ）にも、すは上手出で来たりとて、人も目に立つるなり。本（もと）、名人なれども、**当座の花**に珍しくして、立ち合い勝負にも一旦勝つ時は、人も思い上げ、主も上手と思ひ初（し）むるなり。これ、返す返す、主のため仇（あだ）なり。これも**誠の花**には非ず。年の盛りと、見る人の、一旦の心の**珍しき花**なり。眞の目利きは見分くべし。
この此（ころ）の**花こそ初心**と申す此なるを、極めたるように主の思ひて、早や、申楽にそばみたる輪説（りんぜつ）をし、至りたる風體（ふうてい）をする事、あさましき事なり。たとひ、人も讃（ほ）め、名人などに勝つとも、これは、一旦**珍しき花**なりと思ひ覚（さと）りて、いよいよ、物まねをも直ぐにし定め、なほ、得たらん人に事を細かに問ひて、稽古をいや増すにすべし。されば、**時分の花を誠の花**と知る心が、**眞實の花**になお遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この**時分の花**に迷ひて、やがて、**花の失する**をも知らず。
初心と申すはこの此（ころ）の事なり。
一、**公案（こうあん）**して思ふべし、我が位のほどをよくよく心得ぬれば、それほどの**花**は一期失せず。位より上の上手と思へば、本ありつる位の**花**も失するなり。よくよく心得べし。

24、5歳の頃：現代語訳

この頃に、本人にとっての一生の藝が形成される。だから、稽古・練習もこの時期を境に大きく変わる。声も直り、体格も安定する。能の芸の道に入って良いことは声と姿勢がよくなる事だ。成熟した演技ができるようになる途上でもある。他人が見ればもう完成してしまったように思うほどの上達をするだろう。一度は先輩を凌ぐほどの花（魅力）を見せるようにもなる。しかし、これが本人にとっては大きな災難となる。その演技は本物ではなく、一時的な若さの魅力にすぎない。目の肥えた人から見れば本物とは見ない、本物との違いを見極めている。この時期の演技こそ初心であるのに、すでに能を極めたと本人は思い込み、人にも得意に話し、服装も変えるのは格好の悪いことである。

たとえ、人から賞賛され、名人よりも有名になっても、それは一時的な花・魅力に過ぎないと自覚して、演技を極めようと親しい知人に批評をしてもらい、稽古・練習に打ち込むべきである。だから、この時期の時分の花・魅力がほんものと思う気持ち、実際は本当の自分の花・魅力から遠ざかっていく考えである。そんな人はその慢心に溺れてやがて花・魅力を失っていくことに気が付かない。初心（しょしん）というのはこのこと（この時期の慢心の危機）である。大切なことは、一つに、創意工夫を重ね、自分の演技技術のレベルがどれほどのものか自覚したその花のレベルは生涯なくならない。本来の自分レベルより自分が高いレベルにあると思えば、本来もっているレベルも維持できなくなる。十分に気をつけなければならない。

三十四、五
この此（ころ）の能、盛りの極めなり。ここにて、この條々を極めて、堪能になれば、定めて、天下に許され名望を得つべし、もし、この時分に、天下の許されも不足に、名望も思ふほどもなくば、いかなる上手なりとも、未だ、誠の花を極めぬ為手（仕手）と知るべし。もし極めずば、四十より能は下がるべし。それ、後の証拠なるべし。さるほどに、上がるは三十四五までの此（ころ）、下がるは四十以来なり。返す返す、この此、天下の許されを得ずば、能を極めたりとは思ふべからず。ここにて、なお慎むべし。この此（ころ）は過ぎし方を覚え、また、行く先きの手立てをも覚る時分なり。この此（ころ）極めずば、この後、天下の許されを得ん事、返す返す難かるべし。

34、5歳の頃：現代語訳
この時期が演技の成熟期である。ここで初めてさまざまなことが成熟してきて、いよいよ世間からの名声を得ることができる。もし、この時期に世間からの評判が今一つで、名声にはほど遠ければ、どんなに名人と言われようが、未だに本物の花（魅力）を持てない役者にすぎないと自覚すべきである。この時期までに成熟した域に達していなければ、40歳を過ぎてからは演技力は低下するだけである。何べんも言うが、この時期までに世間から認められないようであれば、能の極めたとは思ってはいけない。
もっと、注意しなければいけないことは、この時期以後の身の振り方を考える事だ。
また、老後の事も考えなければならない時期でもある。この時期までに世間から認めてもらえないで、これから認めて貰えることはほどんどあり得ない。

四十四、五
この此（ころ）よりも、能の手立て、大方変わるべし。たとひ、天下に許され、能に得法（とくほう）したりとも、それに附けても、よき脇の為手（仕手）を持つべし。能は下らねども、力なく、やうやう年ゆけば、身の花も、外見（そとめ）の花も、失するなり。先づ、優れたらん美男は知らず、よほどの人も、直面（ひためん）の申楽は、年寄りては見られぬものなり。するほどに、この一方（ひとむき）は欠けたり。
この此（ころ）よりは、さのみに細かなる物まねをばすまじきなり。大方、似合いたる風體（ふうてい）を、安々と、骨を折らで、脇の為手（仕手）なからんに附けても、いよいよ、細かに身を砕く能をばすまじきなり。何としても、外目花なし。もし、この此（ころ）まで失せざらん花こそ、誠の花にてはあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらん花を持ちたる為手（仕手）ならば、四十以前に天下の名望を持つべし。たとひ、天下の許されたるを得たる為手（仕手）なりとも、さやうの上手は、誠人に殊に我が身を知るべければ、なほなほ、脇の為手（仕手）を嗜（たしな）み、さのみに身を砕きて、難の見ゆべき能をばすまじきなり。かやうに我が身を知る、得たる人の心なるべし。

44、5歳のころ：現代語訳
この頃から、能の演じ方は大きく変えるべきである。たとえ、世間から認められて、この道で主役として生きていくことになったとしても、自分にとって優秀な役を持っているようにしなければならない。能の演技力が衰えなくても、体力は衰え、持ち前の花、演技の味も、姿の恰好よさもなくなっていく。よほどの美男子・イケメンなら知らず、能面を附けずに、素顔で演じる申楽（能・狂言）では、年寄りが演じるのは見られたものではない。

演じれば演じるほど魅力を失う。この時期からは、繊細な演技が必要な能はやってはいけない。たいていは、自分が持っている雰囲気をいとも関単に壊してしまい、役を演じるにしても決して微妙な演技が求められる能を演じてはいけない。どんな役を演じても外観には魅力はない。この時期になってもまだ演技に魅力があれば、それは本物といってもいい。それこそ、50歳近くになっても演技に魅力があればまことに花といってもいい。そんな役者なら40歳前にすでの名声を得ている。たとえ、世間から名声を得た役者であっても、真摯に自分自信のことを知らなければならない。もっといえば、役の演技を身を粉にして研究し、欠点が見えるような演技をしてはならない。このように自分自身をよく知ることこそ人の誠意、心得というものだ。

五十有余

この此（頃）よりは、大方、せねならでは、手立てあるまじ。「麒麟も老いてはおいては駑馬に劣る」と申す事あり。さりながら、誠に得たらん能者ならば、物数はみなみな失せて、善悪見所は少しとも、**花は残るべし**。亡父にて候ひし者は、五十二と申しし五月十九日に死去せしが、その月の四日に日、駿河の国浅間の御前にて法楽仕り、その日の申楽、殊に花やかにて、見物の上下、一同に褒美（ほうび）せしなり。およそ、この此（ころ）、物数をば早や**初心**に譲りて、やすき所少な少なと**色**へてせしかども、花はいや増しに見えしなり。これ、誠に得たりし**花**なるが故に、能は枝葉も少なく、老木（おいき）になるまで、花は散らで残りしなり。これ、目のあたり、**老骨に残りし花**の証拠なり。年来稽古以上

五十歳を過ぎて：現代語訳

この年になると、たいていの役者はどうしようもなくなる。「麒麟も年取ると普通の馬よりも劣る。」という。しかし、本当に習熟した能の演技者は覚えたことを全部忘れてしまって、何も取りえがないようでも、花（魅力）は残している。なくなった父・観阿弥は52歳で5月20日になくなったが、同じ月の4日に駿河（静岡）の浅間神社の祭礼で能を奉納した。その日の能の演技は特に華やかで、見物人は身分に関係なく、一座を褒め、おひねりを出したという。この頃の父は初心の頃の私に自分の演目のいくつかを譲り、演じやすいところだけを演じていたが、それでも演技には花（魅力）は大きく見えた。これが本当に奥義に達した演技で、演技は素朴で、老木のように見え、それでいて花（魅力）は失っていなかった。まさに目の前で老木に花の咲いているのを見た。年齢に応じた稽古、練習についての説明は以上である。

風姿花伝第二　物学條々　中

物学（ものまね）の品々、筆に盡（つく）し難し。さりながら、この道の肝要なれば、その品々を、いかにもいかにも嗜むべし。およそ、何事をも、残さず、よく似せんが本位なり。しかれども、また、事によりて、濃き、淡（うす）きを知るべし。先づ、国王・大臣より始め奉（たてまつ）りて、公家の御たたずまひ、武家の御進退は及ぶべき所にあらざれば、十分ならん事難し。さりながら、よくよく言葉を尋ね、科（しな）を求めて、見所（けんしょ）の御意見を待つべきか。そのほか、上職（じょうしょく）の品々、**花鳥風月**の事態（ことわざ）、いかにもいかにも細かに似すべし。田夫（でんぷ）・野人（やじん）の事に至りては、さのみに細かに、賤（いや）しげなる態（わざ）をば似すべからず。假令（けりやう）、木樵（きこり）・草刈・炭焼・鹽汲などの風情にもなりつべき態（わざ）をば、細かに似すべきか。それよりなほ精（くわ）しからん下職をば、そのみには似すまじきなり。これ上方の御目に見ゆ（べからず。もし見えば、餘にも賤しくて、面白き所有るべからず。このあてがいをよくよく心得べし。

役柄になり切る演技について：現代語訳

能の役柄については書ききれないほど沢山ある。けれど、大切なことなのでそれぞれの役柄を十分に研究すべきである。どんな役柄であっても写実的に具体的に役になり切ることが本筋である。役によっては性格が濃いものも、薄いものもある事を知って、抽象的な演技も知っておかねばならない。国王・大臣の役柄をはじめとして、公家・

皇族の雰囲気や、武士の身のこなし方については、そのような身分にでもないので役になり切ることは難しい。しかし、言葉遣いについて尋ね、立ち振る舞い、身のこなし方を知る人にも聞いてみるべきである。その他、身分の高い人の役柄、花鳥風月の自然の様子についても、事細かに研究すべきである。しかし、身分の低い農夫や大衆の役柄ははいかにもそれらしく賤しく見えるようには演じてはならない。仮にも、木樵、草刈、炭焼き、塩くみなどの風景の一部ともなる役柄の演技について、もっと身分の低い役柄については、そのままリアルに描写して演じてはならない。身分の高い、高貴な人たちには不快に見えることがある。十分に気を付けるべきである。

能の演目には大きく6種のジャンルがある
脇能物（初番目物）・男神物（高砂など）
二番目物・勇士物（八島など）

三番目物・本髢物（井筒など）
四番目物・巫女・女神物（巻絹など）
四五番目物・霊験物（谷行など）
五番目物・女菩薩物（当麻など）

女
およそ、女がかり、若き為手（して）のたしなみに似合ふ事なり。さりながら、これ、一大事なり。まづ仕立（したて）見苦しければ、さらに見所なし。女御（にようご）・御振舞（おんふるまひ）を見る事なければ、よくよくうかがふべし。衣（きぬ）・袴（はかま）の着様（きやう）、すべて私ならず。尋ぬべし。ただ世の常の女がかりは、常に見慣るる事なれば、げにはたやすかるべし。ただ衣・小袖（こそで）の出立（いでたち）は、おほかたの体、よしよしとあるまでなり。舞・白拍子（しらびようし）、または物狂（ものぐるひ）などの女がかり、扇にてもあれ、かざしにてもあれ、いかにもいかにも弱々と、持ち定めずして持つべし。衣・袴などをも長々と踏み含（くく）みて、腰・膝（ひざ）は直（すぐ）に、身はたをやかなるべし。顔の持ち様（やう）、あをのけば見目悪（みめわろ）く見ゆ。うつぶけば後姿悪し。さて、首持ちを強く持てば、女に似ず。いかにもいかにも袖の長き物を着て、手先をも見すべからず。帯などをも弱々とすべし。されば、仕立をたしなめとは、かかりをよく見せんとなり。いづれの物まねなりとも、仕立悪くてはよかるべきかなれども、ことさら女がかり、仕立を以（も）て本とす。

女役現代語訳
たいていの女役は年若い役者が演じるのがふさわしい。そうは言っても、大事なことは立ちい振る舞いがなっていないと、様にならない。身分の高い女官、付き人などの役は服装は好きなように着ているのではなく、必ず決まりごとがあるので、確かめるなければならない。けれども、身分の低い一般の女の役は、日常的に見慣れているので難しくはない。しかし絹の小袖を着た小娘の場合はたいていの場合はすんなりした体形であるほうがいい。また舞・白拍子などの女芸人の役や、物狂いの女の役の場合は、扇や杖などの持ち物をそれとなく弱よわしく感じるように手にすることである。着ている絹の衣も袴も引きずるように崩して、腰は落とさず、ブスと立ち體はゆったりとしたらいい。顔は上向きすればよく見えない。また下向きにすれば、姿勢が崩れる。首をしっかりとすれば、女らしく見えない。袖の長い着物を着て手の先を見せてはいけない。帯の締め方もきつくしてはいけない。女役で肝心なのは着物の着方、着こなし次第でよくも悪くもなる。女役は着こなしで決まる。

老人
老人の物まね、この道の奥儀（おうぎ）。能の位、やがて外目に現はるる事なれば、これ、第一の大事なり。およそ、能をよきほど極めたる為手（仕手）も、老いたる姿は得ぬ人多し。例へば、木樵、鹽汲みの態（わざ）物などの翁形（おきなかたち）をし寄せぬれば、やがて上手と申す事、これ、誤りたる批判なり。冠（かぶり）・直衣（なほし）、烏帽子（えぼし）・狩衣（かりぎぬ）の老人の姿、得たらん人ならでは、似合ふべからず。稽古の劫（こふ）入りて、位のぼらでは、似合ふべからず。
また、花なくば、面白き所あるまじ。およそ、老人の立ち振る舞い、老いぬればとて、

腰、膝を屈め、身を詰めむれば、**花失せて**、古様に見ゆるるなり。さるほどに、面白き所稀（まれ）なり。ただ、大方、いかにもいかにも、そぞろかで、しとやかに立ち振舞うべし。殊さら、老人の舞かかり、無上の大事なり。**花**ありて年寄と見ゆるる公案、委（くわ）しく口伝（くでん）あり。習ふべし。ただ、**老木に花の咲かん**が如し。

老人の役：現代語訳

翁の面

老人を演じることが出来ればこの演芸の世界を極めたと言える。能の演技力はいつかは表に出てくるものなので、このことは一番重要なことである。能の演技力をそれなりに習得した者であっても、老人の役をこなせない人が多い。たとえば、木樵、塩汲みなどの役は姿を老人に似せれば演技が出来ているというが、それは間違いである。冠をかぶったり、、身分の高い服装をし烏帽子をかぶり、狩りの装束をした老人の役はより演技力の高い者でなければつとまらない。長年の稽古を積み重ね、風格が備わらなくては似合わない。また、演技に魅力がなければ面白くもない。老人の演技は、年を取って腰や膝を曲げ、身を縮めれば、古臭く魅力もなく見えて面白さもなくなる。だから、ゆっくりと静かに、丁寧に演じるべきである。さらに言えば、老人の舞はこの上もなく大事にしなければならない。魅力ある老人の演技をするためのくわしく言い伝えらていることがある。十分に耳を傾けなければならない。老木に花が咲くように。

直面（ひためん）

これまた、大事なり。およそ、もとより俗の身なれば、やすかりぬべきことなれども、不思議に、能の位上がらねば、直面（ひためん）は見られぬものなり。先づは、これ假令（けりょう）、その物々によりて學ばん事、是非なし。面色（めんしょく）をば似すべき道理もなきを、常の顔に變へて、顔氣色（かおけしき）を繕ふ事あり。さらに見られぬものなり。振舞・風情をば、その物に似すべし。顔氣色をば、いかにもいかにも、己れなりに、繕はで直ぐに持つべし。

子供が素顔で演じる役（能面をつけない）：現代語訳

面をつけない役を演じることも大変難しい。我々はもとから身分の低い俗人なので、俗人の役を演じるのはやさしそうだけど、実際はそうではない。能の演技力がない者が面をつけないで素顔で演じるのは見るほどの価値はない。これについて演技を教えてもらい研究するのは当然のことである。しかし、顔の表情にも演技を附けようとして、意識して普段の表情を変えてしまうと、これまた見れたものではない。その役を演じるには、立ち居振る舞い、表情をその役に合わせなければならない。顔の演技は、素顔の自分自身の顔であればいい。

物狂い

この道の、第一の面白盡くの藝能なり。物狂いの品々多ければ、この一道に得たらん達者は、十方へわたるべし。繰り返し繰り返し、公案の入るべき嗜みなり。假令（けりょう）、憑（つきもの）の品々、神・仏・生霊（いきりょう）・死霊（しりょう）の咎めなどは、その憑物の體を学べば、やすく便りあるべし。親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るる、かようの思ひに狂乱する物狂ひ、一大事なり。よほどの為手（仕手）も、ここを心に分けずして、ただ一偏に狂ひ働くほどに、見る人の感もなし。思ひ故の物狂ひをば、いかにも、物思ふ気色を本意に当てて、狂ふ所を花に当てて、心を入れて狂へば、感も、面白き見所も、定めてあるべし。かやうなる手柄にて、人を泣かする所あらば、無上の上手と知るべし。これを、心底に、よくよく思ひ分くべし。

およそ、物狂ひの出立（いでたち）、似合ひたるように出で立つべき事、是非なし。さりながら物狂ひに事寄せて、時によりて、何とも**花**やかに出で立つべし。**時の花**を簪頭（かざし）にさすべし。また云はく、物まねなれども、心得べき事あり。物狂ひは、憑物（つきもの）の本意を狂ふといえども、女物狂ひなどに、あるひは修羅・闘諍（とうじょう）・鬼神などの憑く事、これ何よりも悪しき事なり。憑物の

本意をせんとて、女姿にて怒りぬれば、見所似合はず。女かかりを本意にすれば、
憑物の道理なし。また、男物狂ひに女などの寄らん事も、同じ料簡なるべし。
所詮、これ體なる能をばせぬが秘事なり。能を作る人の料簡なき故なり。
さりながら、この道に長じたらん書手の、さやうに合わぬ事を、さのみに書く
事はあるまじ。この公案を持つこと、秘事なり。また、直面の物狂ひ、能を極め
てならでは、十分にあるまじきなり。顔気色をそれになさねば、物狂ひに似ず。
得たる所なくて、顔気色を變ゆれば、見られぬ所あり。物まねの奥儀（おうぎ）
とも申しつべし。大事の申楽などには**初心の人**、斟酌（しんしゃく）すべし。
直面の一大事、物狂ひの一大事、二色を一心になして、面白き所に**花**を
当てん事、いかほどの大事ぞや。よくよく稽古あるべし。

物狂い：現代語訳

**物狂い（「物狂い」を現代語に訳すると、その言葉は差別用語になるおそれがあります。
精神病理学的な用語では多様な症状に対して多様な専門用語があります。ここでは
現代語に訳さず「物狂い」のままにしておきます。能の世界では一番面白い演目となっ
ている。この種の演目の演技を取得した者は、過去・現在・未来あらゆる世界の演目も
演じられる。演技には工夫に工夫を重ねるものとしなければならない。何かにとり憑か
れた物語の演目には、神仏、生霊、死霊の恨み、たたりなどにとりつかれた人の様子を
観察すれば演じやすいという。親子の離別、夫婦の離別、妻に先立たれたことで物狂い
する人を演じるのは大変難しい。どんなに優れた役者もここでは他のことを考えずに、
物狂いの演技に集中しなければ、見物人には感動してもらえない。大切な人へ思い
から物狂いについては、その思いの心情の表現を本心から演じ、異常な様子の中に
見せ所を作って、感情を入れて異常な様を見せれば、見物人を感動させることができる。
このように演技できれば、見せ場では見物人を泣かせることが出来れば、最高の演技
と言える。このことを理解しておかなければならない。
一般的には、物狂いの服装はそのように見えるようにするのは当然である。しかし、
物狂いだといっても、設定によっては、立派な服装にして華やかに見せることもある。
頭に飾りとして季節の花をつけることもある。また、この演技に注意しておかなければ
ならないこともある。物狂いは何かにとりつかれた異常さがあるとは言っても女性の
物狂いや人と人の戦い、喧嘩や鬼神などにとりつかれた悪い物語もある。とりついた
主の本体を演じようとして、女の姿で荒々しい演技では合わない。この場合は女として
演じればとりついた悪は見えない。また同様に男性に女性がとりつた場合も同じである。
結局はこのような能をしないことを暗黙に理解しなければならない。能作家の心得がない
ないためにでもある。能の世界をよく知っている能作家ならそのような無理な物語を書く
ことはない。このような問題を持つことも暗黙のうちにしてはいけないことになっている。
また、面を附けず、素顔で演じる物狂いの役は、演じてはならない。顔の表情を物狂い
にしなければ物狂いには見えない。顔の表情に個性もないのにただ単に表情を変える
だけでは演技にならない。能演技の秘訣である。大事なイベントでは未熟な役者をだす
ことのないように配慮しなければならない。素顔で演じる難しさ、物狂いを演じる難しさ、
その二つを一つにするような演技の難しさは大事な場面に見せ場を持ってくることが
どれほど難しいか、十分に考え、研究しなければならない。**

法師

これは、この道にありながら、稀なれば、さのみ稽古入るべからず。假令、荘厳の
僧正、並びに僧綱等は、いかにも威儀を本として、気高き所を学ぶべし。それ以下の
法體、遁世（とんせい）・修行の身に至りては、抖擻（とそう）を本とすれば、いかにも
思ひ入りたる姿かかり、肝要たるべし。ただし、賦物（ふしもの）によりて、思ひの外の
手数の入る事もあるべし。

僧の役：現代語訳

**僧の役は能の分野では多くないので、そんなに稽古がしなくてもいい。例えば位の高い
僧やその取り巻きの僧たちは威厳のもっている気品を取り入れたらいい。位の高くない
僧や荒行中の僧の場合はいかにもそれらしく精神を集中させている姿にすることが大切だ。
ただし、物語によっては僧の役にさまざまな意味を持たせて演技に複雑さを持たせること
もある。**

修羅
これまた、一體の物なり。よくすれども、面白き所稀なり。さのみにはすさまじきなり。ただし、源平のなどの、名のある人の事を、花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。これ、殊に花やかなる所ありたし。これ體なる修羅の狂ひ、ややもすれば、鬼の振舞ひになるなり。または、舞の手にもなるなりそれも曲舞（くせまい）がかりあらば、少し、舞がかりの手使ひ、よろしかるべし。弓・胡籙（やなぐい）を携えて、打物をも巌（かざり）とす。その持ち様を・使ひ様を、よくよく伺いて、その本意を働くべし。相構へて相構へて、鬼の働き、また、舞の手になる所を用心すべし。

激高し、怒った人物の役：現代語訳

この役はこれで出来上がった分野を作っている。しかし、工夫してもあまり面白味がでない。ただただ、荒々しく怒りを演じることだ。源平合戦で有名な武将の役に花鳥風月の雰囲気を持たせてうまく演じればそれはそれで面白さが出てくる。この場合は特に華々しくしたい。激高し、怒り狂っているだけでは鬼を演じていることになる。また、舞としはも曲舞（くせまい・武将の舞）を取り入れるのもいい。武将の服装で弓と靭（うつぼ・矢入れ）を身に付け太刀を下げる。それらの武具の身に着け方、使い方をよく聞いて、不自然に見えないようにすること。姿勢に気を配り、鬼の動きになっているか、舞の体勢になっているかに注意しなければならない。

神
およそ、この物まねは鬼がかりなり。なにとなく怒れる装（そほ）ひあれば、神体によりて、鬼がかりにならんも苦しかるまじ。ただし、はたと変れる本意あり。神は舞がかりの風情によろし。鬼には更に舞がかりの便りあるまじ。神をば、いかにも神体によろしきやうに出（い）で立ちて、気高（けたか）く、ことさら、出物（でもの）にならでは神といふ事はあるまじければ、衣装（いしやう）を飾りて、衣文（ゑもん）をつくろひてすべし。

神様の役：現代語訳

この役の演技鬼のように演じることだ。それとなく、怒っているように見せて、神様の服装であるので、鬼のように見えても問題はない。しかし、周囲とは違った姿であること。神様の役は舞をするのはふさわしい。鬼では舞をする雰囲気はない。神様の役はいかにも神様らしく出てきて、気品があって、非可視的な神といっても衣装には工夫をしなければならない。

鬼
これ、ことさら大和（やまと）のものなり。一大事なり。およそ、怨霊（をんりやう）・憑物（つきもの）などの鬼は、面白き便りあれば、やすし。あひしらひを目がけて、細かに足・手をつかひて、物頭（ものがしら）を本にしてはたらけば、面白き便りあり。まことの冥途（めいど）の鬼、よく学べば恐ろしきあひだ、面白き所、更になし。まことは、あまりの大事のわざなれば、これを面白くする者、稀（まれ）なるか。まづ、本意は、強く恐ろしかるべし。強きと恐ろしきは、面白き心には変はれり。そもそも鬼の物まね、大きなる大事あり。よくせんにつけて、面白かるまじき道理あり。恐ろしき所、本意なり。恐ろしき心と面白きとは、黒白の違ひなり。されば、鬼の面白き所あらん為手は、極めたる上手とも申すべきか。さりながら、それも、鬼ばかりをよくせん者は、ことさら花を知らぬ為手なるべし。されば、若き為手の鬼は、よくしたりとは、見ゆれども、更に面白からず。鬼ばかりをよくせん者は、鬼も面白かるまじき道理あるべきか。くはしく習うべし。
ただ、鬼の面白からむたしなみ、巌（いはほ）に花の咲かんがごとし。

鬼の役：現代語

鬼の物語は大和（奈良）にとって特別なものだ。一般に怨霊・や憑物の鬼は面白い話であるので演じやすい。脇役やツレに向かって手足を繊細に使って親分気取りで演じれば面白くなる。本物のあの世の鬼を本当に研究すれば、恐ろしいだけで、面白さはない。実際は難しい役なので、面白くできる役者はあまりいない。基本的には強そうで恐ろしいこと。強そうに恐ろしいそうに見えることが面白さになることはある。鬼の演技は大変難

しいからやりかたによって面白くなるはずである。恐ろしいことが第一。恐ろしいことと
だ面白いこととは正反対のこと。から、鬼を演じて面白い役者はコツを掴んだうまい
役者といえる。だからと言って、鬼の役だけを演じる役者には花・見せ場を知らない
役者である。また、若い役者がうまく演じたようでも、面白くない。詳しく研究す
べきである。鬼を演じて面白い役者には岩に花が咲くような面白さがある。

唐事
これは、およそ、各別の事なれば、定めて稽古すべき形木もなし。ただ肝要、出立なるべし。また、面をも、同じ人と申しながら、模様の変わりたらんを着て、一体異様したるやうに風体を持つべし。劫入りたる為手に似合ふ物なり。ただ、出立を唐様にするならでは、手立てなし。何としても、音曲も、働きも、唐様と云う事は、誠に似せたりとも、面白くもあるまじき風体なれば、ただ、一模様心得んまでなり。
この、異様したると申す事など、かりそめながら、諸事に亙(わた)る公案なり。
何事か異様してよかるべきかんれども、およそ、唐様をば何とか似すべきなれば、常の振舞に風体変われば、何となく唐びたるやうに外目に見なせば、やがて、それに成るなり。
異国もの:現代語訳
この種類の演目には決まりごともないので特別の研究をしなければならない。重要なのはその外観容姿である。つける面は同じ人間とはいえ、顔つきが変わっていて異様な雰囲気を持たせなければならない。経験豊かな役者が演じるのにふさわしい。外観容姿を異国風にすることが大切。伴奏の音楽もしぐさ、身振りも異国風にするといっても、完全に似せるだけでは面白さのない演技になるので何かの工夫がいる。
異様な雰囲気といっても、いろいろな面で工夫がいる。何とかして異様に見えるように、異国風に見えるようにするには他の演目で普段の演技に何か変化をつけ、異国風な外観を作れば様になってくる。

風姿花伝第三　問答條々
問。そもそも、申楽を始むるに、当日に臨んで、先づ座敷を見て、吉凶を豫(かね)て知る事は、いななることぞや。
答。この事、一大事なり。その道に得たらん人ならでは、心得べからず。先づ、その日の庭を見るに、今日は能、よく出で来べき、あしき出で来べき、瑞相あるべし。これ、申し難し。しかれども、およその了簡(りょうけん)をもって見るに、神事、貴人の御前などの申楽に、人群集して、座敷未だ静まらず。さるほどに、いかにもいかにも静めて、見物衆申楽を待ちかねて、数万人の心、一同にに、遅しと楽屋を見る所に、時を得て出でて、一聲をあぐれば、やがて、座敷も時の調子に移りて、万人の心、為手の振舞い和合して、しみじみとなれば、何とするも、その日の申楽は早やよし。さりながら、申楽は、御出(おんい)でを本とすれば、もし早く御出ある時は、やがて始めずしてはかなはず。さるほどに、見物衆の座敷いまだ定まらず、あるいは後れ馳(ば)せなどにて、人の立ち居しどろにて、万人の心、いまだ能にならず。されば、左右(さう)なくしみじみとなる事なし。さやうならむ時の脇の能には、物になりて出づるとも、日ごろより色々と振りをもつくろひ、声をも強々(つよづよ)とつかひ、足踏みをも少し高く踏み、立ち振舞ふ風情をも、人の目にたつやうに生き生きとすべし。これ、座敷を静めんためなり。さやうならんにつけても、ことさら、その貴人の御心(みこころ)に合ひたらん風体をすべし。されば、かやうなる時の脇の能、十分によからん事、返すがへすあるまじきなり。しかれども、貴人の御意(ぎょい)にかなへるまでなれば、これ、肝要(かんえう)なり。なにとしても、座敷のはや静まりて、おのずからしみたるには、悪(わろ)きことなし。されば、座敷の競(きそ)ひ後(おく)れを勘(かんが)へて見る事、その道に長ぜざらん人は、左右(さう)なく知るまじきなり。
また曰(いは)く、夜の申楽は、はたと変はるなり。夜は、遅く始まれば、定まりて湿るなり。されば、昼二番目によき能の体(てい)を、夜の脇にすべし。脇の申楽

湿り立ちぬれば、そのまま能は直らず。いかにもいかにも、よき能をとくすべし。
夜は、人音忽々（そうそう）なれども、一声にてやがて静まるなり。しかれば、
昼の申楽は後（のち）がよく、夜の申楽は指寄（さしよ）りよし。指寄(さしよ)り
湿（しめ）り立ちぬれば、直る時分左右（さう）なくなし。秘儀に曰（いは）く、
そもそも、一切は、陰陽（いんやう）の和（くわ）する所の境を、成就とは知るべし。
昼の気は陽気なり。されば、いかにも静めて能をせんと思ふ工（たく）みは、
陰気なり。陽気の時分に陰気を生ずる事、陰陽和する心なり。これ、能の
よく出で来る成就の始めなり。これ、面白しと見る心なり。夜はまた陰なれば、
いかにも浮き浮きと、やがてよき能をして、人の心花めくは、陽なり。これ、
夜の陰に陽気を和する成就なり。されば、陽の気に陽とし、陰の気に陰とせば、
和する所あるまじければ、成就もあるまじ。成就なくば、なにか面白からん。
また、昼の内にても、時によりて、なにとやらん、座敷も湿りて寂（さび）しき
やうならば、これ陰の時と心得て、沈まぬやうに心を入れてすべし。昼は、
かやうに、時によりて陰気になる事ありとも、夜の気の陽に成らんこと、左右
なくあるまじきなり。座敷をかねて見るとは、これなるべし。

風姿花伝・Q＆A：現代語訳

**質問、そもそも、なぜ、申楽（能）を演じるその日に、舞台のある屋敷や庭の下見をして
うまくいくか行かないかを予想するのか？**

**回答、大切なことは、この業界外の人には関係がないことだ。当日、能舞台のある庭を
見れば、うまいくいくか、どうかを想像するヒントがある。それを言葉では説明が難しいこと
ではある。でも、意識して見れば、神社であっても、お屋敷であっても、舞台の前に多くの
人が集まり、ザワザワとしていればいるようであればうまいくいく。それは観客が能の始ま
るの今か今かと待っているからだ。静かになりそうな時を見計らって、最初の一声を出せば、
会場はその雰囲気に高まり、役者の演技に吸い込まれて観客が感動してくれれば、その
日は成功と言える。しかし、能の公演は身分の高い人が観劇されるのが前提であるから、
もし、身分の高い人が早く始めよと言われれば始めないわけには行かない。だから、
会場の観客がザワついて静かになっていなく、また席に付かない人もいても、始めない
わけには行かない。だから、そんな時には、脇役の役者はどんな役であっても役になり
切って、普段より大げさに、派手に動き、声も大きく、足踏みも強く、演技も立ち回りも
目立つようにすれば、会場の観客は静かになだろう。そのような時でも身分の高い人に
気に入ってもらえるように雰囲気を作らなければならない。この時の脇役の演技はこの
状況を十分に理解してうまく演じなければならない。身分の高い人に気に入ってもらえ
れるまでが大切だ。そうなれば、会場は静かになり後の演目も演じやすくなる。
そのようにうまくいくかどうかはこの分野のことをよく知った人でなければ予測がつかない
ものだ。また一方、夜の公演となると、状況は一変する。夜遅く始まると、陰気になり
がちになる。夜の最初の演目が陰気なものから始めると、あとあと陰気さを引きずる
ことになって立ち直れない。昼間に二番目の演目としていい陽気な演目を夜の一番手
にもってくるのがいい。
夜の会場は少しざわめいていても、最初の一声でシーンとなる。昼の公演は後半が面白く、
夜の公演は出だしの前半が面白い。昼と夜とは陰と陽との調和があるようにすれば成功と
いえる。昼は陽、これに合わせて静かに演じようとする役者は陰となるように演じる。
陽気には陰気を合わせること、これが能がうまく演じられる最初の要点である
能の面白さの要点である。夜の陰には陽気をもってきて調和が取れる。
陰と陽との調和がなければ完全とはいえない。また、昼であっても屋敷や会場を
陰として認識しなければならないこともある。その逆に、夜であっても陽として認識
しなければならな時もある。公演の前に会場を下見しておくというのはこのためである。

この回の問答條々の部分では最初の問答をご紹介しました。
次回は序破急、勝負、不審、得手、差別、風情へと問答は続いていきます。

ここまでに出てきた一つ目のキーワード「花」を魅力、見せ場と現代語に訳しましたが、
あなたには別の訳が思いつくかも知れません。それをあなたの「花」となるよう
にして下さい。

二つ目のキーワードは「初心」です。その道を進と決心した時の最初心だけでなく、
次々と新たな状況に直面したとき、新たな決心を積み重ねることを諭しているように
思います。　Keep on refining yourself !

三つ目のキーワードは「公案」です。禅宗では師匠と弟子が問答をかわします。
師匠は常識では答えられない問題を出します。師匠は公案せよと迫ります。
師匠が求めているのは弟子が考案、思案、工夫による発想の転換、独創をすることです。

能では演者を為手（仕手）、脇、連（つれ）と読んでいますが、現代風にいえば、
主役、共演、助演に相当するかと思います。演劇が成立するために最小限度に
必要なのはこの3つの役とも言えます。現代の日本は世界一の高齢化社会の
最先端を歩んでいます。
世阿弥曰く、老人の役は老木に花が咲くがごとくに。高齢者には励みの言葉かと思います。

「風姿花伝」 2/3に続きます。　（T.K.）